

# 博物館の社会的役割の推移

小川 裕見子

## 1. はじめに

大阪府では、2008年2月の橋下徹大阪府知事の就任以降、現在削減主体の行財政改革を進めている。なかでも、大阪府が運営する公の施設に対して大幅な見直しの指示を受けた行財政改革プロジェクトチームは、83の府立施設のうち、図書館以外のすべての施設の廃止・売却について検討をおこなった。泉北考古資料館、弥生文化博物館、近つ飛鳥博物館という教育委員会事務局文化財保護課が管理運営し、主に考古資料を展示する3館もその対象となった。2008年4月に発表された大阪府財政再建プログラム第1次試案では、弥生文化博物館は廃止とされた。泉北考古資料館も堺市に移管を打診、近つ飛鳥博物館も廃止される他館の機能を集約・多機能化し、総合歴史博物館を目指すという指示であった。これには、各々の館の地元住民や、大阪府の博物館を支援する会をはじめとして、海外までも及ぶ様々な団体から反対要望が出され、多くの支援イベントがおこなわれた<sup>1)</sup>。

結局のところ、弥生文化博物館と近つ飛鳥博物館は一旦現状のまま存続することになったが、泉北考古資料館は堺市に移管することになった<sup>2)</sup>。2館の現状存続もあくまで一時的なもので、館の状況を観察しながら見直しは毎年おこなわれ、早くも2度目の危機が訪れつつある。そして、財政削減は必至で周辺市町村との連携を強く進めることが条件となった。それに加えて、どの博物館も「待ち」の博物館ではなく、積極的に外へ「出かける」活動的な博物館になる、という教育委員会提案をうけて、そうしたことを知事からの具体的な存続条件として掲げられることになった。利用者を館で迎えるだけでなく、学校への出前授業や諸イベントへの出店など、通常は博物館内でおこなわれている機能を館外へ持ち出すということである。

この一連の出来事は、なぜ博物館が必要なのかということ問い直すよききっかけになった。そこで本稿では、日本の博物館のあり方と海外の状況とを比較しながら、いま社会的に求められている博物館像をさぐってみようと思う。

特に大阪府における博物館の捉え方が適切なものであるかを検討する意味でも、他のケースとの比較が必要であろう。筆者が長期滞在し、群在する博物館の状況の変化・変遷を把握することができるイギリスの事例がある。そこでは、博物施設に集客力があり、行政が一定の方向性と指針をもって博物館をサポートする姿勢にあるといった事柄が対照的に働いている。こうした差はどこに起因するのか、本稿ではいくつかの館の現状を提示し、重ね合わせることで原因を抽出してみたい。

その分析には、そこに至るまでの背景を把握する必要もあろう。イギリスの事例の一方で、日本の現状の一端を推察する手段としては、ここ数年にわたり関西大学博物館実習の授業で一瀬和夫が展示評価の一貫としておこなった、数館でのアンケート調査の成果をも合わせて参考にする。

ミッションの異なる複数の博物館で収集したデータであることから、幅広い利用者の意見が反映されると考える。さらに、博物館に隣接する史跡公園での調査も同時におこなっている。そこでは近くに住みながらまた、近くまで来ながら入館しない人々の声も、なぜそうなのだろうかを聞いている。その他の機会におこなった社会調査の結果もふまえ、これからの博物館のありかたを探るきっかけを見いだしたい。

## 2. イギリスにおける博物館の社会史的経験とその推移

筆者は2007年にイギリスの博物館の現状を紹介する小稿を書いた<sup>3)</sup>。しかしながら、その後、2009年3月に再度渡英し、主だった博物館数館を見学する機会をもち、短期間に多くの変化があったことに驚かされた。日本だけではなく、他国でも博物館は様々な側面でも変革の時代を迎えていることに疑いはない。

2005年度に、イギリス (United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland) では一年で8,000万人以上の人々が博物館を訪れ、首都ロンドンの所在するイングランド (England) では約43%の人が少なくとも1回は博物館を訪れた<sup>4)</sup>。2001年12月1日をもって、イギリスでは主要な国立博物館の入館料はすべて無料化された<sup>5)</sup>。これは飛躍的な利用者増加につながり、イングランドで無料化された博物館の平均利用者数は有料時と比べて124%となった。また、2008年度は無料化7年目にして最も利用者が多く、有料時と比べておよそ900万人増となった<sup>6)</sup>。これは、博物館の利用が社会的に広く浸透している値と言える。休日にレジャーとして訪れる、あるいは学校の校外学習で訪れる場所のオプションとして受け入れられていることも1つの要因であろう。

最近の渡英時に筆者は、大英博物館 (British Museum) やビクトリア&アルバート博物館 (Victoria & Albert Museum)、科学博物館 (Science Museum)、自然史博物館 (Natural History Museum) などを訪れた。いずれも上記調べによる年間入場者数で上位を占める博物館施設であるが、毎度ひっきりなしにたくさんの学校団体に遭遇した。利用団体は小学生から高校生までその年代幅も広い。また、海外・国内を合わせ、イギリスで観光客が最も多く訪れるアトラクションのトップ10のうち、2005年度は6件、2008年度は8件までもが博物館及び美術館が占めるという人気ぶりである<sup>7)</sup>。この事実は、日本における状況と幾分異なるかもしれないが、利用者が多く社会に受容される博物館像をさぐる上で、幾ばくかの可能性の示唆をしてくれるに違いない。

日本語で「博物館入り」という表現が「お蔵入り」とともにしばしば見受けられる。ある「もの」が博物館に入れられた時点で「秘蔵」・「死蔵」されてしまい、気安く触れることができなくなってしまうという心情の表現である。

「もの」は社会で流通するうへでは、所有者をはじめとする周りの人々を巻き込み、ある種の社会生活を営んでいる<sup>8)</sup>。市場を介して所有者が移動する場合もあれば、お金との交換ではなく友情や愛情などの人間関係を媒体として移動することもある。この移動の際に、貨幣価値であったり、センチメンタルバリューであったり、各々の「もの」が移動経路によって様々な付加価値を獲得していく。価値が増加することもあれば、時間の経過による劣化や流行の変化、また媒体となっていた人間関係の破綻などにより、減少あるいは消失することもある。

例えば、購入した新車は時がたつにつれて市場価値は下がる。ある時期をすぎると、中古車の

査定にかけても0円となり、市場価値はなくなる。しかし、さらに時間が経過して孫の代までその車がよい状態であれば、ビンテージ・カーとして全く新たな価値を創出することになる。そしてもっと時が経ち、その車がビンテージ・カーとして博物館に寄贈されたなら、それは流通という社会的環境から外れて商品ではなくなり、博物館コレクションの一部となる。しかし、これは現状のまま凍結して「もの」としての社会生活の終わりを意味するのではなく、展示品としてのあらたなライフ・ヒストリーをあゆむことになるのである。

本稿の文頭で紹介した大阪府の現状のように、博物館も、その展示・収蔵品も建物も、社会変化から自由にはなり得ない。よくも悪くも全く影響を受けずに博物館の存在が担保されることはありえない。また、社会的に安定した近年でも博物館は展示・収蔵物が凍結保存されるための場所ではなく、それらがダイナミックに活用されるための施設として社会的に要求されている。

イギリス政府の文化・メディア・スポーツ省が2005年に通達した指針「未来を考える－博物館と21世紀の生活－博物館の価値（*Understanding the Future: Museums and 21<sup>st</sup> Century Life – The Value of Museums*）」には、このことが明記されている。博物館のみの将来を考えるだけではなく、21世紀の社会をより豊かなものにするためという視点で、博物館の社会的役割が論じられる<sup>9)</sup>。博物館のコレクションに関して、「コレクションは確かにすべての博物館において館の中心となるものに違いない。しかし、コレクションは同時にダイナミックで動的な活用資源となることが望まれる。…（中略）…この新しい21世紀には、コレクションをより広く開放することが、これまでにないほど重要になるであろう、これは、博物館のコレクションに対する既存の所有権を再定義することにつながるかもしれない<sup>10)</sup>と述べる。一旦手に入れた宝物を大事にしまっておく、または展示室で見せることだけが博物館の役割ではないし、博物館が自館のコレクションに対してもつ所有権はそのような性質のものではない。私蔵から公有へ移行した時点で、コレクションの所有者は市民や国民、大衆であり、博物館とそのスタッフは安全に保管し活用するためにそれらを預かっているガーディアン（保護者・後見人的存在）なのである。

しかし、博物館という施設が成立した当初からそのような状況にあったわけではない。先述のように、博物館の性質や役割は社会的環境に大きく影響を受け、変化する。そのことを再確認するために、ここでヨーロッパにおける博物館のはじまりから現在に至るまで、コレクション・所有者・利用者・博物館という空間の4つの構成要素がどのような位置関係にあったのかを振り返ってみたい。

## ヨーロッパにおける博物館のはじまり

ヨーロッパの博物館成立前夜のプロト・ミュージアムともいえるコレクションは、「珍奇な棚（*Cabinet of Curiosities / Kunst – und Wunderkammer*）」と呼ばれる王族や富裕層の私的なコレクションとしてはじまる。これはイタリアにおいて特に盛んであったが、16世紀の後半には社会現象的にヨーロッパ中に広まった。コレクションの内容は、古代の遺物からはじまり、後に遠くの国々から渡ってきた珍しい物へと対象がひろがった<sup>11)</sup>。それぞれのコレクションに特色もみられる。例えばプライベート・コレクションとして、16世紀末葉に有名であったイタリア・ポローニャのアントニオ・ギガンディ（*Antonio Gigandi*）や同じくナポリのフェランテ・インペラート（*Ferrante Imperato*）のコレクションは、動植物や鉱物からなる自然界の品々が中心であった。一方で、メ

メディチ家のコレクション (*Medici's studiolo*) をはじめとする王侯貴族のものは、自然界のものよりも人間の手によるもの、秀逸な芸術作品や古代の美術品などに焦点があてられていた<sup>12)</sup>。

そもそも、コレクションは現在のように誰にでも開放されていたわけではなかった。当時は主に2つの目的があった。1つには所有者の富と権力を誇示することにある。世界中の様々な地域からの珍しい物を所有することに、その地域の自然界や人間社会に自分の権力の影響が及んでいることを象徴させようとしていた。コレクションを収集・保持するためには莫大な富と権力、そして知識が必要とされた。2つめは、専門家の教育と研究の素材となる資料を提供することにある。特に自然界のものを収集することは、それらを間近で観察することを可能にし、初期のこの手のコレクションはほとんど植物学や医学に従事する知識人の手によるものであった<sup>13)</sup>。

これらのプライベート・コレクションは、次第に対象を拡げ、大衆に開放されていった。現在の博物館に似た施設に形を変えていくのである。しかしながら、博物館が一般大衆に広く公開されるようになったのは、19世紀になってからのことである。これは社会的な階層性の再構築に含まれておこった流れであると思える。

### 知の殿堂から社会教育の場へ

「近代」の到来とともに博物館は大きな変革をむかえた。コレクションの肥大化と役割の変化とともに、博物陳列にはそれ専用の空間が必要であると認識されるようになった。初期のプロト・ミュージアムはたいてい「博物館としての目的」で創られた建物ではなく、学術・教育機関やその他の用途をもって創られた建物を転用して収蔵・展示されていた<sup>14)</sup>。18世紀末葉に至ってやっと、博物館はその目的に沿う専用の空間をもつ建造物を必要とする文化施設であるという認識が広がった<sup>15)</sup>。この時期になって、現在みられる状態の主な博物館群が堰を切ったように創られはじめる。1823年の大英博物館を皮切りに、1851年のオックスフォード・アシュモリアン博物館 (*Ashmolean Museum*)、1832年のロンドンのトラファルガー広場にあるナショナル・ギャラリー (*The National Gallery*) などが続く。この現象は、日本では1980年代におこった博物館施設の急増にあたるのかもしれない。

ここで博物館は、近代の大衆にとって、急激に流行の空間へと成り代わった。より幅広い大衆に開かれることによって、コレクションは単なる専門家のための観察・研究資料や、所有者の富と権力を見る側に誇示する機能を備えるだけではもはやなくなり、一般大衆にとっての教育の場としての存在感を高めた。

今まで目にすることもなかった遠くはなれた時代のものや遠隔地域の遺物が展示されているのを見て、新しい知識を得ることは刺激的なものであったに違いない。その一方で、展示を通して学ぶということは、裏を返せば展示を創る側の解釈を学ぶことになる。その立場にあっては、そこで国民に政治的な意図をもはらんだ教育をするための媒体を手に入れたことにもなる。

例えば、オックスフォードのピット・リバーズ博物館 (*Pitt-Rivers Museum*) はピット・リバーズ将軍<sup>16)</sup>の理想に基づき国民教育を1次的な目的として1884年に建てられた。当時はダーウィンが1859年に記した『種の起源』に基づく進化論が流布し、ピット・リバーズは、動植物の種のみではなく、文化や社会にも進化論があてはまり、社会構造は段階的に進化していくという立場をとった。彼は、博物館を通じた大衆の教育にも熱心であった。特にいわゆる労働者階級の人々

は無知なことが多いので歴史に関する知識を教育しなければならないと説いた<sup>17)</sup>。「教育目的の博物館では、展示品は（社会進化の）連続性を示すことができるものを選択し、…（中略）1つの形式が次の形式へ繋がることを示すように配列して展示する必要がある」<sup>18)</sup>という。そしてピット・リバーズ博物館の展示は、そのように社会進化を彷彿させる変化の連続性を示すように創られた。社会が未開から文明へと進化していき、「現在も狩猟採集を続けて行っている未開や野蠻の段階のまま進化が滞っている」とでもいうような社会進化論は、今日では倫理的にも手放しで受容されているわけではない。教育の必要性を説く動機となっていた、階層意識についても同様である。しかしながら、そこでの展示には当時の上流階級及び中産階級以上の中での文化の流行が反映され、博物館展示は社会政治的意図と結ばれるようになる。その展示はそのままの姿をとどめ、今では物だけではなく、19世紀の博物館の姿を表す景観博物館でもある。

さらに、博物館という空間はこれまで触れることのなかった異なる様々な社会的階級に属する人々が同一空間において共在することにより、いっそう複雑で社会的な意図が交錯する場として存在するようになった。展示から知識を吸収することに加えて、労働者階級の人々が上流階級の振る舞いを目の当たりにすることで、そこから社会的に洗練された行動や生活様式を見習わせようとした。

これは近代になってあらわれた、博物館の新しい役割であった。そのために博物館独自の空間、つまり建物を必要とした。博物館組織における社会的側面の再編は、社会における支配者階級及びエリート層の再編と同時に起こったのである<sup>19)</sup>。

## 19世紀から現在への変化

こうして博物館は社会教育施設としての地位を確固たるものにしていった。一方でこの時代に創られたものは博物館施設の建造物としてもすぐれていて、その町のランドマークとして活躍することで景観の一部としての居場所も確立する。教会や城砦のように、当面取り壊すことが発想されることのないような町のシンボルにもなった。当時の多くの博物館は、そもそも私的ではなく、公の利益のために設立されたはずである。しかし、時間の経過とともに社会の価値観は変化した。そこで博物館の役割に対するその要求に変化が生じた時、どのように追従する対応力が必要なのだろうか。生きながらえた博物館はソフト面・ハード面ともにその方策が創出されたはずである。

ロンドン南西部に所在するビクトリア&アルバート博物館は、設立当初から現在まで教育活動に最も熱心な博物館の1つである。1852年に設立されたサウスケンジントン博物館（South Kensington Museum）が現在のビクトリア&アルバート博物館、自然史博物館、科学博物館3館の前身となった。主な展示品は美術工芸品や手工芸品などであるが、教育目的で作られたその博物館の伝統を踏襲し、現在も運営がつづく。

2000年頃までのビクトリア・アルバート博物館の教育部門は、開館時間中は常にオープンな相談窓口を館の地下1階にもっていた。窓口には常時職員が滞在し、訪れる人々に対応する。豊富なワークシートやテーマごとに教材がパッケージされた、「ティーチャーズ・バック」という教師用の資料一式などがストックされ、非常に個性豊かで面白い教材が希望と相談に応じて無料で配布されていた。

しかし、数年ぶりに訪れた2009年3月にはこの博物館の地下スペースは大きく様変わりしていた。担当職員の話では、2008年に大掛かりな改修工事をおこない、サックラー・エデュケーション・センター（Sackler Education Centre）が地下に設けられたからだと言う<sup>20</sup>。

製薬会社で財を成した慈善家サックラー氏の息子が設立した財団（Dr. Mortimer and Theresa Sackler Foundation）の寄附によってこの地下工事がまかなわれた。

教育スペースに膨大な投資をおこなったことももちろんだが、この事例ではそれに加えて2つの注目すべき点がある。1つには、資産家の莫大な寄付金にもとづく改修であったこと。欧米諸国の博物館では寄附を受けるのは当然のことであり、それなくしては運営がなりたたない。そのために専属の部署や職員が置かれるほどである。ビクトリア&アルバート博物館をはじめ、膨大な利用者数を誇る人気のイギリスの主要博物館もその例にもれない。入館無料である代わりに、利用者からの少額の個人献金も募られ、大英博物館では出入り口のすべてにボックスが置かれ、推奨金額の£3（500円弱）がボックスの中央に大きく掲げられる。テイト・モダンでは、さすが現代美術館らしい。コインを入れると動くという凝ったオブジェのようなデザインのボックスがある。日本の博物館は、公営の場合は特に寄付金の受け取りが難しい。条例による基金の設置など、様々な手順を踏むことが要求され、寄附の授受体制がうまく整っていないことも資金難の一因である。解説をしてくれた担当職員との会話でも、この話題になり驚いていた。彼は、ベネッセやサントリーなどの美術館は企業に直接所有・運営されているのではなく、公営施設にそれらの企業が多額の寄附をしたからその名前が付けられていると理解していたようだった。

もう1つは、建物の外観や場所は全く変わらずに、大きな改修をおこなったことにある。外から見ただけでは、道行く人にその変化は一見わからない。ビクトリア&アルバート博物館は、先述の、博物館施設の建造物としてもすぐれていて、町の景観の中でのランドマークになっている館の1つである。陸軍の土木技師であったフランシス・フォーク大尉（Captain Francis Fowke）の設計で1859年から建設され、黄褐色のテラコッタを外観の装飾に多用したイタリアン・ルネッサンスを彷彿させるこの建物は、隣接する自然史博物館、科学博物館などとともに大型博物館コンプレックスを形成し、サウス・ケンジントン地域（South Kensington）周辺の景観の重要な一面を成している。この博物館の外観を損なうことや、そこからなくなってしまうことは考えられないことなのである。日本では、それにあてはまるであろう3つの旧帝室博物館に加えて、一体いくつの博物館がそのような文化的景観における位置づけを確立しているだろうか。

## 様々な展示の形

さらに、近年リニューアルを経た展示施設に、イングランド北東部のヨーク（York）市街にあるヨルヴィック・バイキング・センター（Jorvik Viking Centre）がある。1984年にオープン、2001年にリニューアル・オープンした。センターは過去25年間に通算150万人を超える人が訪れる人気の施設である。現在は、2度目のリニューアル工事中で、2010年2月に再オープンする。これは、ヨークシャー地方における集客力ナンバー1のアトラクションとしてのこれまでの業績が認められ、文化・産業・観光大臣の発案による地域観光振興計画の中間重点施設に位置づけられ、£100万（2億円前後）の助成を受けたことによる<sup>21</sup>。

オープン当時からここで展示のキーとなっているのは過去の復原である。この歴史的な街にお



ヨルヴィック・バイキング・センター前の行列



復原展示室へむかう乗り物

いて、大型複合商業施設の開発に伴う市街中心部の発掘調査があり、その際に、紀元10世紀にバイキングが住んでいた時代の遺跡が発見されたことが発端である。湿った土壤にパックされた状態で眠っていた遺跡は他には例を見ない良好な残存状況にあり、当時の生活を生々しく再現することを可能にしたのである。利用者はカートに乗り、綿密な調査成果に基づいて復原されたバイキングの村の中を旅することができる。建物や生活用品、人々の服装はもちろんのこと、生活に伴う匂いや音まで再現される。乗り物に乗ったまま展示の中を抜けるという、ディズニーランド的とも言えそうな利用者の導線は、開館当初の時代には従来型博物館展示とは趣が全く違ったため、商業的すぎるとの批判もあった。しかしながら、時間がたっても衰えない人気は頭の固い当時の博物館関係者に対して、新しい形態の過去の展示施設を認めさせるに至った。

この復原は決していい加減なものではなく、良質な遺構・遺物が発掘された事実からこそなし得たものであることが人気の秘訣に他ならない。綿密な調査研究に裏付けられた展示なのである。

そしてそれに加えて、立地が2つの利点を生んでいる。1つめは、市街のまさに中心地にあること。このセンターが組み込まれている複合商業施設にも集客力がある。熱心に宣伝をしなくても、人通りが多く潜在利用者があふれている場所にある。さらに重要なもう1つには、復原展示の場所性が本物であることがあげられよう。復原のもととなる遺構は、まさにその場で発掘調査されたものなのである。今回のリニューアルでは、建物の下に保存されている地下遺構を復原整備し、さらにその場所性を全面に押し出す計画のようである。たとえ復原であれ、その展示をわざわざそこまで見に来る値打ちがあるといえる。他所では見られないし、コンテキストを失うのだから。このことについては、また日本の事例と比較して後述したい。

もう1つ、復原展示と野外博物館的な性質を兼ね備えた人気の展示施設が、アイアンブリッジ峡谷博物館である（Ironbridge Gorge Museum）。1986年イギリスで最初にユネスコ世界文化遺産に登録された7件にも含まれる。この18世紀の近代化遺産は、産業革命を象徴するアイアン・ブリッジ（鉄橋）が架かる峡谷を中心に町全体が博物館となる。中央には大きな駐車場を備えるガイダンス施設がある。そこで、この峡谷を見学するために必要なあらゆる情報が手に入り、チケットも購入できる。主に9つの多彩な博物館及びアトラクションが町中に散在する感をかもしだす。タイル生産や磁器生産など、展示される時代の町で実際に操業していた工場などがその産業



アイアンブリッジ峡谷



アイアンブリッジ峡谷のガイダンス施設

を展示することに転用される場合もあれば、ブリスツ・ヒル・ビクトリアン・タウン（Blists Hill Victorian Town）のようにビクトリア時代の町の様子が復原されるエリアもある。ここでは、入り口で当時の通貨を模したコインに両替をして入場し、中では食事やショッピングも楽しめる。展示品がガラスケースの中やロープの向こうにとどまるのではないことが一番大きな人気の理由であろう。フロアスタッフ自身も展示の一部となり、利用者と直接交流することによって、展示に「動き」が生まれる。

タイル産業の展示をするジャックフィールド・タイル博物館（Jackfield Tile Museum）などは、今でも生産を続けており、その様子も見学できる。ある時点で凍結した展示を傍観するのではなく、利用者自身が空間として過去を体験できるダイナミックさもまた人気の秘訣なのであろう。

各々の施設個別のチケットで入場することもできるが、ガイダンス施設では、すべての共通チケットが£20（3500円前後）で売られている。車でしかアクセスできないこの峡谷は、決して観光客にとって便利の良いところではない。展示施設の数も多いし、各々の距離が離れているため、この場所を見学するのは1日仕事である。しかしながら、日本人ツアー客の観光バスも乗り付けるほど、海外観光客のあいだでも人気スポットの1つなのである。工場も峡谷も、そこにかかる橋も雑木林も、あらゆる手段やメディアを使つての、その時代の記憶を記録しようとする試みが、街ごと全部思い出の空間のような錯覚を覚えさせる。タイムスリップ体験が楽しめる場所となっている。

### 3. 近年の博物館利用状況の把握—アンケート調査にもとづく大阪の事例

上記のイギリスの事例での変化のように、特に1990年代以降は日本においても、博物館展示は展示資料を重視するオブジェクト・センタードから利用者を重視するクライアント・センタードへ移行している<sup>22)</sup>。その中で、利用者へ直接意見や感想を求めるアンケート調査や聞き取りは、主体的に利用者のニーズを拾うために有効な手段の1つであると考えられる。

本稿では博物館利用者の生の声を集めたデータとして、平成20・21年度に関西大学博物館実習の展示評価の授業の一部としておこなった、大阪歴史博物館・難波宮及び大阪城天守閣・大阪城公園という2つの大阪を代表する史跡公園とそれに隣接する博物館でのアンケート調査の結果を



得ることができたので、ここで紹介する。

### 調査対象施設について

2館はともに大阪市が所有・運営し、大阪を代表する公営博物館であり、至近距離にあるが、利用者層や利用状況から環境や展示内容まで、様々な側面において条件や性質が異なる。共通点は、どちらも大阪市中央区という大阪の都心に所在することと、史跡公園とセット関係にあることがあげられる。入館料はどちらも一般600円、開館時間は大阪歴史博物館が9時30分～17時まで、金曜のみ20時まで、大阪城天守閣は9時～17時までを基本的に桜のシーズンやゴールデンウィーク、夏休みや秋の紅葉時などの行楽シーズンには18時あるいは19時まで延長する。そしてこの2つの史跡はともに、大阪が古代から政治経済の中心として栄えたことを象徴する場として、大阪市が打ち出す「難波宮跡と大阪城公園の連続一体化構想（以下、一体化構想）」の基軸をなす。

大阪歴史博物館は、一体化構想をもとに移転したNHK大阪放送局の新放送会館との複合施設として建設され、平成13年11月3日開館した。同年3月末をもって閉館した大阪市立博物館の機能を引き継ぐ「大阪市立新博物館」と、大阪市内で蓄積された発掘調査成果を活用する「考古資料センター」双方の構想を併せもつ博物館として位置づけられ、基本理念の1つには、難波宮のサイトミュージアムとしての機能をもあげる<sup>23)</sup>。

一方で博物館施設としての大阪城天守閣は、昭和6年からはじまり、戦時中ですら昭和17年まで開館しつづけたという長い歴史をもつ。平成9年の大阪城天守閣大改装後に現在の様相にリニューアルされた大阪の観光集客の中核施設である。昨年の入館者は約130万人、一昨年は約139万人を数え<sup>24)</sup>、大阪の歴史・文化を活かした魅力の向上を通じた観光振興計画でも重点項目にあげられる。現状でも利用者数は群を抜いて多いが、大阪市はこの計画で、くり返し来訪する人を増やすために都市の魅力の積極的な発信をめざす<sup>25)</sup>。国際的ベストセラーの『Lonely Planet』シリーズをはじめ海外のガイドブックにも積極的にとりあげられることから、外国人観光客も多い。

### 調査の手順と概要

さてこの対象的な2館であるが、各々のケースにおいて博物館内のみでなく史跡公園内でも調査をおこなったことで、館の利用者のみでなく、近くまで来ていても入館しない人々の声も聞くことができた。また、アンケート調査用紙にあげられた項目に対する直接的な回答のみでなく、アンケート調査をおこなう過程の会話を通じて学生が回答者から聴取した情報も、聞き取り調査の成果として考察に反映させることができる。自然な会話を通じて得られた情報は、誘導されるのではなく回答者が自ずから開示した本音の部分ともいえ、貴重な情報源である。

実際に博物館及び史跡公園でアンケート調査をおこなう前に、博物館実習の学内授業で準備の機会をもった。調査の目的及び留意点について議論をし、その後に実際に当日使用するものと同じアンケート調査用紙を用いて、教室内で学生同士2人1組になってシミュレーションをおこなった。全員が、聞き役・聞かれ役の双方を経験し、また調査に要する時間の概算も把握できるようにした。そして実施の当日、出席者は博物館と史跡公園の2班に分かれて調査をおこない、午前と午後で場所を入れ替わった。アンケート調査用紙は博物館内用と史跡公園用の2タイプ用意した。各々の館の入り口には、関西大学博物館実習アンケート実施の断り書きをし、実習生は名

札あるいは腕章を着用した。利用者にアンケートのために話しかける前に利用者の行動観察をおこない、タイミングを見計らって話しかける方針をとり、聞き込みは主に展示室を出たところで実施した。一人ずつ会話をしながら質問の答えを、質問者が調査用紙に書き込む形式をとった。個人情報についての聞きにくいと思う項目（年齢など）のみ、回答者に調査用紙を渡して記入してもらってもよい、という方針をとった。調査終了後は、参加学生全員でミーティングを行い、調査の所感を述べ合い、経験を共有する場をもうけた。その詳細は、調査結果の集計とともに、本号の一瀬和夫による報告を参照されたい。

アンケートの質問項目は、歴史遺産及び博物館に対するニーズの多様性及びサイト・ミュージアムの社会的役割と活用方法を探ることを使命として作成した。そして、この調査を通じて、利用者に博物館・史跡であるという認識をもつ人を増やすことをねらいとした。当日の実施諸条件やサンプル数などの詳細は、平成20年度・21年度各々の調査結果の概要とともに次章以下で述べることとする。

## 4. アンケート調査（1）大阪歴史博物館と難波宮

### 調査実施当日の様子

大阪歴史博物館及び難波宮でのアンケート調査は、平成20年11月30日の日曜日に実施した。分析の対象となった回答数は、大阪歴史博物館内52名（男性29名、女性23名）、難波宮内69名（男性31名、女性38名）であった。当日は、晴れたり曇ったりの天気で長時間外にいるのにはやや寒いのが、アンケートの回答に最低限必要な10～15分程度なら、外で会話をするに支障のない天候であった。博物館内は、秋の行楽シーズンで特別展の開催中の日曜日であったため、通常よりは利用者が多かった。しかしながら、午前9時30分の開館直後は利用者が館内にほとんどおらず、1時間ほど経過するまでは回答者を見つけることが難しかったようである。

博物館内用・難波宮公園内用、2通りのアンケート調査用紙を用意し、学生に各々館内2名、公園内2名をノルマとして調査を行った。質問の詳細は、図1に掲載した調査用紙及び本号の一瀬報告を参照されたい。

### アンケート・聞き取り調査結果について

集計結果の詳細についてはすべてをあげることは紙面の都合からここでは控えるが、ここでは今回の3つのねらい、①大阪歴史博物館・史跡難波宮跡の利用者数を増やす、②開館後7年を経過した利用者の様相をさぐる、③隣接する史跡公園と博物館の関連性の浸透度をはかるといったものに、つながり得ることを中心にして、調査の結果であきらかになったことを以下に述べることにする。

### 利用者層と知名度について

どこから来たかというQ1の問いからわかるように、館内・公園ともに利用者の50%近くが大阪市内の利用者である。大阪府下まで含めると、その割合は各々82%・93%となる。客層としては家族連れもしくは一人で来た人が圧倒的に多く、友人と来た人がそれにつづく（Q5）。利用

**大阪歴史博物館についてのアンケート調査**

「あまり深く考えず、差し支えない範囲内でお答えいただければ幸いです。どうぞよろしくお願致します。」

1)どこからいらっしゃいましたか？徒歩圏内 大阪市内 その他の大阪府下 他( ) ( 府/県 )

2)大阪歴史博物館にいらっしゃるのは初めてですか？ はい いいえ ( 回目 )

3)この博物館のことをどこで知りましたか？新聞 テレビ HP 大阪歴史博物館 その他( )

4)今日のご来訪の理由は？近所なので 歴史に興味 友人に誘われて 通りがかり その他( )

5)今日は、どなたと一緒にいらっしゃいましたか？  
親 配偶者 子供 孫 同僚 友人 恋人 近所の人 遠方からの来客 一人 その他( )

6)今日は何を持っていらっしゃいましたか？ (該当するものすべてお答えください)  
カメラ ビデオ お弁当 本 筆記用具 その他( )

7)館内のどこで長い時間をすごされましたか？ ( )  
理由( )

8)今日は、何の写真を撮りましたか？具体的にお聞かせください。  
館内(特に ) 景色 その他( )  
理由( )

9)今日、一番印象に残っているものはなんですか？ ( )  
理由( )

10)今日のご来訪は楽しめましたか？ はい いいえ ( )

11)今日は帰りに、どこかに立ち寄りませんか？ はい(具体的に) ( ) いいえ ( )

12)今日ここに来る前にどこかに寄りましたか？ はい(具体的に) ( ) いいえ ( )

13)今日は難波宮には行きましたか？ はい いいえ その理由( )

14)難波宮に今までに行ったことがありますか？ はい(頻度) ( ) いいえ ( )

15)今日は大阪城には行きましたか？ はい いいえ その理由( )

16)大阪城に今までいったことがありますか？ はい(頻度) ( ) いいえ ( )

17)今日の来訪を誰かに話しますか？親 子供 孫 友人 配偶者 先生 隣人 その他( ) (話さない)

18)難波宮について、どこかでご覧になったことがありますか？  
資料室で読んだ 本で読んだ 新聞で読んだ 自分で調べた テレビで見た 人に聞いた その他( )

19)難波宮についてもっと知りたいと思いませんか？はい( ) いいえ( ) 理由( )

20)大阪府下での考古学的成果についてもっと知りたいと思いませんか？はい( ) いいえ( ) 理由( )

21)難波宮は誰のものとおもいますか？ 藩邸の住人 大阪市民 大阪府民 研究者 大阪府(行政) 日本国民 世界の人々 発掘した人々 自分 誰でも その他( )

22)歴史に興味はありますか？はい( ) いいえ( ) 理由( )

23)歴史的なもの(その他の遺跡・建物・発掘されたもの等)は保存されるべきだと思いますか？  
はい( ) いいえ( ) 理由( )

24)あなたご自身の生活に、歴史はどのようなかわりをもっていますか？ ( )  
ご自身について、差し支えない範囲内で教えてください。

性別: 未婚・既婚・その他 趣味: 好きな本のジャンル: 休日の過ごし方:

年齢: 1.0歳以下 1.0代 2.0代(前半・後半) 3.0代(前半・後半) 4.0代(前半・後半) 5.0代(前半・後半) 6.0代(前半・後半) 7.0代以上

職業: 学生(中学生 高校生 予備校生 大学生 専門学校生 大学院生) 主婦 定年退職(元) 有職者(可能な範囲で具体的な職種を) その他( )

好きな本のジャンル: 休日の過ごし方: 出身地:

**難波宮跡についてのアンケート調査**

「あまり深く考えず、差し支えない範囲内でお答えいただければ幸いです。どうぞよろしくお願致します。」

1)どこからいらっしゃいましたか？徒歩圏内 大阪市内 その他の大阪府下 他( ) ( 府/県 )

2)難波宮にいらっしゃるのは初めてですか？ はい いいえ ( 回目 )

3)難波宮のことをどこで知りましたか？新聞 テレビ ホームページ 大阪歴史博物館 その他( )

4)今日のご来訪の理由は？近所なので 歴史に興味 友人に誘われて 通りがかり その他( )

5)今日は、どなたと一緒にいらっしゃいましたか？  
親 配偶者 子供 孫 同僚 友人 恋人 近所の人 遠方からの来客 一人 その他( )

6)今日は何を持っていらっしゃいましたか？ (該当するものすべてお答えください)  
カメラ ビデオ お弁当 本 筆記用具 その他( )

7)公園内のどこで長い時間をすごされましたか？ ( )  
理由( )

8)今日は、何の写真を撮りましたか？具体的にお聞かせください。  
公園内(特に ) 景色 その他( )  
理由( )

9)今日、一番印象に残っているものはなんですか？ ( )  
理由( )

10)今日のご来訪は楽しめましたか？ はい いいえ ( )

11)今日は帰りに、どこかに立ち寄りませんか？ はい(具体的に) ( ) いいえ ( )

12)今日ここに来る前にどこかに寄りましたか？ はい(具体的に) ( ) いいえ ( )

13)今日は大阪歴史博物館には行きましたか？ はい いいえ その理由( )

14)大阪歴史博物館に今までに行ったことがありますか？ はい(頻度) ( ) いいえ ( )

15)今日は大阪城には行きましたか？ はい いいえ その理由( )

16)大阪城に今までいったことがありますか？ はい(頻度) ( ) いいえ ( )

17)今日の来訪を誰かに話しますか？親 子供 孫 友人 配偶者 先生 隣人 その他( ) (話さない)

18)難波宮について、どこかでご覧になったことがありますか？  
資料室で読んだ 本で読んだ 新聞で読んだ 自分で調べた テレビで見た 人に聞いた その他( )

19)難波宮についてもっと知りたいと思いませんか？はい( ) いいえ( ) 理由( )

20)大阪府下での考古学的成果についてもっと知りたいと思いませんか？はい( ) いいえ( ) 理由( )

21)難波宮は誰のものとおもいますか？ 藩邸の住人 大阪市民 大阪府民 研究者 大阪府(行政) 日本国民 世界の人々 発掘した人々 自分 誰でも その他( )

22)歴史に興味はありますか？はい( ) いいえ( ) 理由( )

23)歴史的なもの(その他の遺跡・建物・発掘されたもの等)は保存されるべきだと思いますか？  
はい( ) いいえ( ) 理由( )

24)あなたご自身の生活に、歴史はどのようなかわりをもっていますか？ ( )  
ご自身について、差し支えない範囲内で教えてください。

性別: 未婚・既婚・その他 趣味: 好きな本のジャンル: 休日の過ごし方:

年齢: 1.0歳以下 1.0代 2.0代(前半・後半) 3.0代(前半・後半) 4.0代(前半・後半) 5.0代(前半・後半) 6.0代(前半・後半) 7.0代以上

職業: 学生(中学生 高校生 予備校生 大学生 専門学校生 大学院生) 主婦 定年退職(元) 有職者(可能な範囲で具体的な職種を) その他( )

好きな本のジャンル: 休日の過ごし方: 出身地:

図1 大阪歴史博物館・難波宮アンケート調査用紙

**大阪城天守閣についてのアンケート調査**

「あまり深く考えず、差し支えない範囲内でお答えいただければ幸いです。どうぞよろしくお願致します。」

1)どこからいらっしゃいましたか？徒歩圏内 大阪市内 その他の大阪府下 他( ) ( 府/県 )

2)大阪城天守閣にいらっしゃるのは初めてですか？ はい いいえ ( 回目 )

3)大阪城天守閣のことをどこで知りましたか？新聞 テレビ HP その他( )

4)今日のご来訪の理由は？近所なので 歴史に興味 友人に誘われて 通りがかり その他( )

5)今日は、どなたと一緒にいらっしゃいましたか？  
親 配偶者 子供 孫 同僚 友人 恋人 近所の人 遠方からの来客 一人 その他( )

6)今日は何を持っていらっしゃいましたか？ (該当するものすべてお答えください)  
カメラ ビデオ お弁当 本 筆記用具 その他( )

7)天守閣内のどこで長い時間をすごされましたか？ ( )  
理由( )

8)今日は、何の写真を撮りましたか？具体的にお聞かせください。  
天守閣内(特に ) 景色 その他( )  
理由( )

9)今日、一番印象に残っているものはなんですか？ ( )  
理由( )

10)今日のご来訪は楽しめましたか？ はい いいえ ( )

11)今日は帰りに、どこかに立ち寄りませんか？ はい(具体的に) ( ) いいえ ( )

12)今日ここに来る前にどこかに寄りましたか？ はい(具体的に) ( ) いいえ ( )

13)今日は大阪城公園の場所には行きましたか？ はい( ) いいえ( ) その場所・理由( )

14)大阪城公園の場所には今までに行ったことがありますか？ はい(頻度) ( ) いいえ( )

15)今日は難波宮には行きましたか？ はい( ) いいえ( ) その理由( )

16)難波宮に今までいったことがありますか？ はい(頻度) ( ) いいえ( )

17)今日は大阪歴史博物館には行きましたか？ はい( ) いいえ( ) その理由( )

18)大阪歴史博物館に今までいったことがありますか？ はい(頻度) ( ) いいえ( )

19)今日の来訪を誰かに話しますか？親 子供 孫 友人 配偶者 先生 隣人 その他( ) (話さない)

20)大阪城について、どこかでご覧になったことがありますか？  
資料室で読んだ 本で読んだ 新聞で読んだ 自分で調べた テレビで見た 人に聞いた その他( )

21)大阪城についてもっと知りたいと思いませんか？はい( ) いいえ( ) 理由( )

22)大阪府下での考古学的成果についてもっと知りたいと思いませんか？はい( ) いいえ( ) 理由( )

23)大阪城は誰のものとおもいますか？ 藩邸の住人 大阪市民 大阪府民 研究者 行政 日本国民 世界の人々 発掘した人々 自分 誰でも その他( )

24)歴史に興味はありますか？はい( ) いいえ( ) 理由( )

25)歴史的なもの(その他の遺跡・建物・発掘されたもの等)は保存されるべきだと思いますか？  
はい( ) いいえ( ) 理由( )

26)あなたご自身の生活に、歴史はどのようなかわりをもっていますか？ ( )  
ご自身について、差し支えない範囲内で教えてください。

性別: 未婚・既婚・その他 趣味: 好きな本のジャンル: 休日の過ごし方:

年齢: 1.0歳以下 1.0代 2.0代(前半・後半) 3.0代(前半・後半) 4.0代(前半・後半) 5.0代(前半・後半) 6.0代(前半・後半) 7.0代以上

職業: 学生(中学生 高校生 予備校生 大学生 専門学校生 大学院生) 主婦 定年退職(元) 有職者(可能な範囲で具体的な職種を) その他( )

**大阪城公園についてのアンケート調査**

「あまり深く考えず、差し支えない範囲内でお答えいただければ幸いです。どうぞよろしくお願致します。」

1)どこからいらっしゃいましたか？徒歩圏内 大阪市内 その他の大阪府下 他( ) ( 府/県 )

2)大阪城公園にいらっしゃるのは初めてですか？ はい いいえ ( 回目 )

3)大阪城公園のことをどこで知りましたか？新聞 テレビ HP その他( )

4)今日のご来訪の理由は？近所なので 歴史に興味 友人に誘われて 通りがかり その他( )

5)今日は、どなたと一緒にいらっしゃいましたか？  
親 配偶者 子供 孫 同僚 友人 恋人 近所の人 遠方からの来客 一人 その他( )

6)今日は何を持っていらっしゃいましたか？ (該当するものすべてお答えください)  
カメラ ビデオ お弁当 本 筆記用具 その他( )

7)公園のどこで長い時間をすごされましたか？ ( )  
理由( )

8)今日は、何の写真を撮りましたか？具体的にお聞かせください。  
公園内(特に ) 景色 その他( )  
理由( )

9)今日、一番印象に残っているものはなんですか？ ( )  
理由( )

10)今日のご来訪は楽しめましたか？ はい いいえ ( )

11)今日は帰りに、どこかに立ち寄りませんか？ はい(具体的に) ( ) いいえ ( )

12)今日ここに来る前にどこかに寄りましたか？ はい(具体的に) ( ) いいえ ( )

13)今日は大阪城天守閣には行きましたか？ はい( ) いいえ( ) その場所・理由( )

14)大阪城天守閣には今までに行ったことがありますか？ はい(頻度) ( ) いいえ( )

15)今日は難波宮には行きましたか？ はい( ) いいえ( ) その理由( )

16)難波宮に今までいったことがありますか？ はい(頻度) ( ) いいえ( )

17)今日は大阪歴史博物館には行きましたか？ はい( ) いいえ( ) その理由( )

18)大阪歴史博物館に今までいったことがありますか？ はい(頻度) ( ) いいえ( )

19)今日の来訪を誰かに話しますか？親 子供 孫 友人 配偶者 先生 隣人 その他( ) (話さない)

20)大阪城について、どこかでご覧になったことがありますか？  
資料室で読んだ 本で読んだ 新聞で読んだ 自分で調べた テレビで見た 人に聞いた その他( )

21)大阪城についてもっと知りたいと思いませんか？はい( ) いいえ( ) 理由( )

22)大阪府下での考古学的成果についてもっと知りたいと思いませんか？はい( ) いいえ( ) 理由( )

23)大阪城は誰のものとおもいますか？ 藩邸の住人 大阪市民 大阪府民 研究者 行政 日本国民 世界の人々 発掘した人々 自分 誰でも その他( )

24)歴史に興味はありますか？はい( ) いいえ( ) 理由( )

25)歴史的なもの(その他の遺跡・建物・発掘されたもの等)は保存されるべきだと思いますか？  
はい( ) いいえ( ) 理由( )

26)あなたご自身の生活に、歴史はどのようなかわりをもっていますか？ ( )  
ご自身について、差し支えない範囲内で教えてください。

性別: 未婚・既婚・その他 趣味: 好きな本のジャンル: 休日の過ごし方:

年齢: 1.0歳以下 1.0代 2.0代(前半・後半) 3.0代(前半・後半) 4.0代(前半・後半) 5.0代(前半・後半) 6.0代(前半・後半) 7.0代以上

職業: 学生(中学生 高校生 予備校生 大学生 専門学校生 大学院生) 主婦 定年退職(元) 有職者(可能な範囲で具体的な職種を) その他( )

図2 大阪城天守閣・大阪城公園アンケート調査用紙

者の満足度は高く、館内・公園内とも90%を超える。

しかしながら、館内・公園ともにQ13・14からわかるように、公園と博物館の利用者は必ずしも重ならない。博物館のサイト・ミュージアムとしての機能はそれほど浸透していないことが示唆される。館内・公園内のそれぞれにおいて、一方の施設を利用するために目前まで来ていながら、もう一方の施設には足を伸ばしていないことがわかる。実際にアンケート調査をおこなった学生の所感でも、「難波宮では、難波宮から博物館に行く人は少なかったが、難波宮から大阪城に行く人は多かったのもので、その違いが印象に残った（女子学生）」、「大阪城・大阪歴史博物館・難波宮の3ヶ所がアンケートに出てきたが、全部行っている人はいなかった（女子学生）」、「難波宮と博物館とで来る人の目的が全然違うと感じた。…（中略）…難波宮の場合は必ずしも歴史に興味がある人ではなく、散歩の人が多かった。博物館には行きませんか？という問いにも、今日は行かないという人が多く、興味のない人が多かった（男子学生）」などと、館と公園の利用者層の違いが印象に残ったこととしてあげられた。

アンケート結果を見ても、公園でのアンケート結果では、難波宮を知っている理由は（Q3）「近所だから」が最も多いことに加えて、来訪の理由も（Q4）「近所だから16名」が最も多い。次いで「犬関連15名」「散歩9名」であるが、散歩の中にもさらに犬連れが含まれる。一方で、館内のアンケート結果では、来館の理由は（Q4）「歴史に興味13名」が最も多く、ついで「特別展11名（特別展「江戸と明治の華一皇室侍医ベルツ博士の眼」が開催中）」となった。また、館内で一番印象に残っているものは（Q9）の問いには、最も多い「9階の船場の模型展示11名」について「10階古代の展示9名」で、特に難波宮を一望する窓のブラインドが上がるようすは印象に残っているようだったが、それが必ずしも難波宮の興味、もしくは直接史跡に足を運ぶことには繋がっていない

博物館と合わせて難波宮に行かない理由には、「知らなかったから」という回答者も4名いた。他には「博物館目的なので」、「興味がない」、「前に行ったことがあるからいい」、「しんどい」などの理由があげられた。当日難波宮に行かなかった人は回答者の92%で、そのうち「行ってみたい」と答えた人は1名だった「博物館で見た情報で充分だ」という声もあった。今まで難波宮に行ったことがある利用者は35%いたが、定期的に行く人はいなかった。これは、公園内でのアンケート結果にある難波宮の利用者の80%がリピーターであることとも合致せず、やはり、公園と博物館の利用者層が重ならないことがわかる。次項であげる大阪城天守閣のように、史跡公園の中を通らなければ博物館にたどりつかないという強制動線ではないため、博物館を訪れて、10階の窓から見える難波宮に感動しても実際に史跡公園まで足を運ぶかどうかは利用者の時間的な配分次第というところもある。窓からは全景が俯瞰できるため、上から見ただけでその場に行ったように思えて満足するのかもしれない。そうであるならば、これは遺跡を体感できる展示としては成功しているともいえるのだが。

公園内での調査では、博物館の存在すらしらなかったという人も2名いた。スポーツをしにきた人は歴史に興味があると答えたのに大阪歴史博物館があることも知らなかった。…（中略）…場所などを説明した。」という。さらに、「難波宮では公園内に今いるのに、史跡としての難波宮の存在も知らなかった（男子学生）」利用者がある一方で、「難波宮で聞き取りをした人に、難波宮に来るのは初めてですか？と聞いたら、難波宮ってこのこと？と言われた、週に2回も来て

いる人だったのに歴史的な宮だったことを知らなかった（女子学生）」など、史跡公園内にいながら遺跡であることを認識していない利用者がある。これは主に、難波宮の利用者が史跡に興味があるのではなく、公園として利用するために来ていることに起因するのであろう。

### 潜在的利用者について

他にも学生は当日、「難波宮でのアンケートで大阪歴史博物館についてたずねたら、パンフレットは？」と聞かれた。持っていたらよかったと思った（女子学生）」らしいし、こちらは大阪歴史博物館・難波宮での調査ではないが、次項で述べる大阪城天守閣でアンケートをおこなった時の話で、「難波宮も大阪歴史博物館も行ったことがないと言っていた人にアンケートで話していたら、その後で、そんなんあるなら行ってみようかな、と言っていた（女学生）」という。平成20・21両年度をつうじて、忙しくて協力してもらえない場合は多くあるにしても、アンケート調査に協力を求めた際に一旦足をとめて応じてくれた利用者は、ほぼ全員が快く協力して会話をしてくれたことをみても、「…利用者とコミュニケーションができて楽しかったので、アンケート調査などをおこなうこと事態が博物館や難波宮の広報につながるのではないかと感じた（女子学生）」という意見には一理ある。大阪城公園内においても、調査実施当日は大阪城ホールで吹奏楽の大会があったため公園内のあちこちで練習する様子がみられ、それが楽しかった・印象に残っているという声が多くあった。利用者は、イベント開催などと同様に何か館内あるいは公園内で通常とは違う予想外の動きがあることが、その時その場にいる臨場感が楽しいのではないだろうか。たとえそれが活性化のための意図的なものでなくても、計画されたイベントでなくても、である。

### さらなる活用を目指して

調査対象であった大阪歴史博物館と難波宮史跡公園においては、利用者層が重ならないことが顕著であった。歴史に興味はありますか？（Q22）の問いに、館内では81%、公園内では62%の利用者が「はい」と答えた。大阪歴史博物館には、特別展をはじめ、歴史に興味があり、展示をゆっくり見たいという利用者が多かった。また、府外からの観光客もいた。難波宮については、歴史遺産としてのみの特性でなく、利用者層も歴史ファンのみでなく、特に近隣の住民から余暇を過ごす親しみのある場所としてのニーズが高かったといえる。散歩、犬がのびのびできる場所、都会で緑がある場所としての評価が高かった。難波宮においての博物館の周知、またその逆も充分でない可能性はある。公園内に博物館に関する看板や掲示があればという提案は利用者の方からあった。館内においては、難波宮は一望できる環境にあるが、逆にそれで充分見たと感じる利用者も多いようで、展示からどうフィールドに誘うことができるかがサイト・ミュージアム機能を果たすためのキーとなるといえる。これについては、後に、アイアンブリッジ峡谷の例などとも比較・検討したい。

ただ、大阪歴史博物館・難波宮史跡公園ともに、利用者が大阪城の利用者と重なっており、大阪城を訪れたことのあるという回答者は100%に近かった。しかしながら、大阪城においても、天守閣の展示を見に訪れる利用者と、大阪城公園の散歩のために訪れる利用者との差異があることが予想できる。大阪城というメジャーな観光スポットという知名度の高い史跡の場合と、性質

の異なる難波宮の調査結果とではどのような違いがあるのか、そのさらなる検討のために調査をおこなったので、それを次項で紹介する。

## 5. アンケート調査（2）大阪城天守閣と大阪城公園

### 調査実施当日の様子

大阪城天守閣及び大阪城公園でのアンケート調査は、平成21年11月29日の日曜日に実施した。分析の対象となった回答数は、大阪城天守閣内80名（男性32名、女性46名、性別未記入2名）、大阪城公園内73名（男性31名、女性40名、性別未記入2名）になった。当日は、朝から天気がよく、昼過ぎに少し雲が出て気温が下がったものの、概ね13～15℃と外でも過ごしやすい一日だった。博物館内は、秋の行楽シーズンの日曜日であったため利用者は多く、当日の天守閣入城者は6,000名を超えていた。大阪城公園も紅葉がすばらしく、観賞に訪れた利用者が朝9時15分の集合時間の時点で天守閣前の広場はとても賑わっていた。中国語や韓国語も飛び交い、国際的な観光地であることが明白だった。

こちらも天守閣館内用・大阪城公園内用、2通りのアンケート調査用紙を用意し、こちらは平成20年度の場合と違い、学生数に対して利用者数が多かったため、各々館内3名、公園内3名とノルマを増やして調査を行った。質問の詳細は、図2に掲載した調査用紙及び本号の一瀬報告を再度参照されたい。

### アンケート・聞き取り調査結果について

こちらも集計結果における数値は、今回の調査のねらいにかかわる結果を概観する。ねらいには、近接する施設である大阪歴史博物館・難波宮との調査データ比較のため、①大阪城天守閣・大阪城公園の利用者に博物館・史跡であるという認識をもつ人を増やす、②隣接する史跡公園と博物館の関連性の浸透度をはかる、③前年度調査をおこなった近隣の歴史遺産である大阪歴史博物館・史跡難波宮における調査結果との比較（利用者層・利用目的などにおいて）の3つに設定した。質問内容についても、比較を可能にするため対応するようにした。

### 利用者層について

Q1からわかるように、天守閣内では80名中51名（約64%）、公園では72名中33名（約46%）が他府県から来た利用者である。公園内では散歩に来た人の割合が多いため、近隣の利用者の比率が高い。客層としては夫婦連れもしくは友人と来た人が圧倒的に多く、親子連れがそれにつづく。公園では1人で来た人が9名と、天守閣の3名より明らかに多い（Q5）。この利用者の内訳は、来訪の目的と相関関係のある結果となった。たとえば、天守閣の利用者で他の施設に立ち寄らないで天守閣を訪れるためだけに家を出てきた人は24%（Q11・12）と極めて低い値で、大阪歴史博物館の37%と比べても低いが、大阪城公園内の42%・難波宮の43%と比較すると際だつ。公園は両者ともに、散歩のためにブラッと家を出てきた人を多く含むことに起因する値である。大阪城天守閣の場合は、先述のように遠方からの観光客や海外（主に中国・韓国・台湾など）からのツアー客を含むため、通天閣やUSJ・海遊館、場合によっては京都などとセットで巡ること

が多い。また、調査当日は先に少し触れたように大阪城ホールでの吹奏楽大会のついでに訪れたという利用者も多かった。

大阪城公園と難波宮、2つの史跡公園内における利用者層の重なりは、前者での調査の結果、難波宮での調査時にみられたほどの重なりはなかった。もちろん、散歩愛好家の中には両公園ともに散歩コースに取り入れている人が多く、難波宮にも行ったことのある大阪城公園利用者も20%程いるため、天守閣よりは利用者層が重なる。しかし難波宮の利用者の大半を占める大阪近辺の居住者は、大阪城公園には誰もが1度くらいは行ったことがあるということで、その逆は成立しなかった。

### 利用者の満足度

利用者の回答でまず目立ったのは、大阪城天守閣利用者の満足度の高さである。今日の来訪は楽しかったかと訪ねる問い(Q10)に、無回答の3名を除き77名全員が「はい」と答えた。歴史に興味がある利用者が6割前後であるのに対して、興味がなくても利用者は満足しているようである。大阪歴史博物館・難波宮でも、楽しくなかったと答えたのは前者では1名、後者でも6名(有効回答60名中)と満足度は極めて高かったが、大阪城天守閣では「時間がないくらい楽しかった(40代男性)」、「初めてで興味深いもの多かった(10代男性)」など、ポジティブな感想があり、心から楽しんだ様子が聴取できた内容から垣間みえる。歴史に興味はありますか?(Q21)の問いにも、「はい」と答えた割合が60%弱と、大阪歴史博物館の81%や難波宮の62%と比べても決して高い割合ではなかったが、「もっとゆっくりみたい(男1・女2名)」、「今日来たのをきっかけに興味をもった(男1・女2名)」、「帰りに『太閤記』でも買って帰ろうかと思う(30代女性)」など当日の来訪をきっかけに大阪の歴史に興味をもった様子がうかがえる。観光施設として多方面から利用者を集客し、大阪の歴史・文化の広報をするという役割を果たしているといえるその反面、大阪城についてもっと知りたいかという問い(Q21)に肯定的だったのは、天守閣で58%、公園で52%と半数余りにとどまる。その理由に、「充分知っている(天守閣・男)」、「今は満腹(天守閣・男)」とあるように、満足しきったために大阪城についての情報集めの目的はこれで完了、というような意識になった利用者も多いようである。

この満足度の高さには、天気がよく、紅葉がすばらしいなど、天守閣周辺の環境の諸要素が特に調査当日プラスに働いたこともあるが、「いいえ」という回答は全くなかったことは特筆に値する。最も長い時間を過ごした場所、写真をとったものや印象にのこったこと(Q7・8・9)を訪ねる過程で、「大阪の代表的シンボル」、「記念」、「日本の特徴」などのコメントが数項目において複数みられ、「年賀状用に子どもの写真を撮った」という20代女性もいた。男子学生があげた「とりあえず大阪に来たら大阪城」という遠隔地からの利用者のコメントが示すように、わかり易い明瞭な動機のもとに、定番の期待通りの来訪がかなったのであろう。

### 知名度と潜在的利用者について

しかしながら、前項で紹介した一体化構想を目指すものの、2地点での利用者層は必ずしも重なっていない。Q15~18の難波宮と大阪歴史博物館に関する項目の回答からわかるように、天守閣内・公園の利用者の間で難波宮及び大阪歴史博物館の地名度は高くない。どちらにも行ったこ

とのない人は天守閣内で71%と極めて高い割合を示し、公園内でも51%と半数を超える。公園内の地名度がやや高いのは、難波宮が散歩愛好家の中でよく知られているからに他ならない。ここでも、行ったことのない理由に、知らないから行ったことがないという回答がみえる。女子学生の1人は「(自分が話した利用者は) 大阪城についてはもともと知っている、という人が多かったのに難波宮については全く知らないばかりだった。大阪歴史博物館も、行ったことがある人は1人だけで他の人はみんな知らないと言っていた。大阪城は有名なんだなあと感じた」という。また、「年配の男性が、難波宮を知らないと言ったが、場所などを説明したところ、あ～あの公園か、と言っていた。場所は知っているけど難波宮として認識していないんだな(女子学生)」と語る。この傾向は前述の平成20年度に大阪歴史博物館・難波宮でおこなった調査で得た結果が再確認されたことになる。そして、「難波宮も大阪歴史博物館も行ったことがないと言っていた人にアンケートをするうちに、そんなあるなら後で行ってみようかな、と言っていた」という先にもあげた女子学生の話にあるように、話を聞けば興味をもつ人は多く、現状での利用者層が異なるとはいえ、潜在的利用者の存在はみられる。

大阪城のこの知名度を支える一端ともなる興味深い傾向について、今回の調査でわかったことがある。ビジュアルでわかりやすい大阪のシンボルであることに加えて、秀吉人気にも支えられる。今年は特にNHK大河ドラマ「天地人」に登場したこともあり、アンケートの回答でもきっかけや興味にかかわる項目で「大河ドラマ」、「天地人」、「テレビ」というキーワードが多くみられた。そして、大阪城は誰のものだと思うかという問い(Q23)に、天守閣内と公園内でもともに9名ずつ(有効回答数は天守閣で65・公園内で59・複数回答可)の利用者が、「豊臣秀吉」をあげた。栃木県から来たという他府県出身の利用者も含まれる。現在の大阪城の姿は豊臣期のものではないし実際は大阪市営の施設であるにもかかわらず、またこちらからその選択肢を示したわけでもないのに400年以上も前に没した人物の名前があげられたことには驚いた学生も多かったようである。大阪での秀吉人気は顕著であり<sup>26)</sup>、大阪城天守閣・大阪城公園と人気の人物像が直接的に結び付くことにも知名度の高さは起因する。一方の難波宮では橘諸兄や孝徳天皇がそれにあたるのかもしれないが、秀吉と比べるとその地味さは否めないし、誰もその名前をあげていないことから、史跡を象徴するような特定のシンボルがない。

また、大阪城の利用者の大半を占める観光客には海外出身者も含まれる。アンケート調査の回答者にも、中国・台湾・香港・ニュージーランド・ロシアの出身者が含まれる。「話をした中国語圏からの利用者は全員歴史に興味があると言っていたし、大阪城についても、大阪府下の考古学的調査の成果についても知りたいと言っていた、しかし、ツアーの中に大阪歴史博物館などは組み込まれておらず、存在も誰も知らなかった。このような歴史好きの外国人にも来てもらえるようにもっと知ってもらえたら」と、調査後に中国出身の女子学生は話した。ロシア出身で金沢から来たという20代女性利用者も、歴史には興味があるという回答だった。大阪歴史博物館には行ったことがない利用者にも歴史や大阪府下での考古学的成果に興味はあるという回答はたくさん得られた(Q22・24)。もちろん長い歴史をもつ大型観光集客施設である大阪城天守閣と、開館10年に満たない歴史系に焦点をあてた社会教育施設である大阪歴史博物館とでは、利用者や知名度に関して数の上での比較は適当でないし、近接するだけにお互いの役割分担もあろう。しかしながら相互の発展のために、広報や勧誘を含めて、この一方のみを訪れている潜在的利用者を



実際の利用者に転換する方策は、「もっと知りたい」、「知らなかった」、「きっかけがあれば」という利用者のニーズにも合致するものとなるはずであろう。

## 6. 博物館の機能とダイバーシティ

さて、この2つのケースでの調査成果を比較し、今求められる博物館像の一端を探ってみたい。平成21年度の大阪城天守閣・大阪城公園でのアンケート調査をおこなうにあたって、当日の朝、実習生と手順などについての確認の話し合いをもっていたときに、「展示についての質問がほとんどない（女子学生）」この質問項目は意味があるのか、というニュアンスの学生からの問題提起があった。しかしながら、果たして利用者は展示を見ることを主目的にしているのだろうか。本当に展示を見るのが博物館体験のプライオリティーなのか問いなおす必要がある。

### 展示+α

Q7・8・9の一番長い時間を過ごした場所、何の写真を撮ったか、一番印象に残っているもの、の一連の質問項目をみてみたい。まず大阪歴史博物館内では、特別展の開催期間中でもあったため、長い時間を過ごした場所も印象に残っているものも「特別展」という回答がもっとも多い。次いで、10階の難波宮の展示であったり、展示物に関する回答が大半を占め、わずかに窓から見える景色の写真をとったり、スタンプラリーや体験もので長い時間を過ごしたり印象に残っていたりする。対照的に大阪城天守閣では、長い時間を過ごしたのは52名と圧倒的に展望台で、撮影した写真も展望台からの景色が44名と、城の外観が次いで14名である。その他にも、お堀や石垣などの周辺付随施設もあげられる。展示では、甲冑や屏風、茶室などがあげられるが、当日の来訪が楽しかった理由（Q10）には、「天気がよかった」、「紅葉がすばらしい」、「景色が良かった」、「周辺もよかった」などという声が多くある。これには、展示以外のプラスαな体験に感動した様子がうかがえる。展示はもちろん見学するし楽しむが、それ以上の楽しみ方がみつかるで一層の集客につながるのであろう。展示は、歴史系である限り、能動的に見たいと思う利用者はその分野に興味をもった人間に幾分限られることであろう。しかしながら、他にも楽しみが見つかるなら、利用者層の幅はグッと広がり利用者増につながる。

自らの経験を振り返ってみれば、イギリスでは博物館は展示を見るための施設ではなかった。博物館に付随する施設のみを利用するために訪れることも度々あった。ミュージアム・ショップやレストランが充実している館が多いからである。ミュージアム・ショップは、展示品の関連分野と博物館学にかかわる本や、直接的にその博物館や展示品、テーマにちなんだ土産物が豊富に取り揃えられている。大英博物館やテイト・モダンなどは、館のロゴマークもおしゃれにデザインされており、ブランド商標となっている。

また、ミレニアム・プロジェクトなどを経て近年新築・増改築された博物館にはノーマン・フォスター卿（Sir Norman Foster）による大英博物館のグレート・コート<sup>27)</sup>や近代化遺産と呼ばれてもおかしくないような発電所<sup>28)</sup>をヘルツォグ&ド・ムラン（Herzog & De Meuron）が改築したテイト・モダンなど、建物そのものが話題になり、見学対象となる館が増えた。どちらの館も、それだけが目当てで訪れる利用者が存在するレストランを持つ。たとえばテイト・モダンにはテ



昔と変わらない大英博物館の外観



大英博物館 グレイト・コート

ムズ川を挟んでロンドンのシティ地区を一望できる屋上レストランがあり、金・土曜日には夜11時まで営業している。カフェの窓ぎわの席は常に満席である。大英博物館にもグレイト・コートの中央、ガラス張りの天井の下にレストランがあり、こちらも木・金曜日は夜10時半まで営業する。どちらも、木・金曜日は展示フロア自体も大英博物館は夜8時半、テイト・モダンは夜10時までオープンしており、仕事帰りにも立ち寄ることができる。おしゃれな空間とレストランは博物館の展示目当てでない施設利用者に間口を広げ、開館時間の延長はそれらの利用者にも展示へ足を延ばすことができる環境を備える。

先述のビクトリア&アルバート博物館で大幅な改修がおこなわれたことからわかるし、テイト・モダンや大英博物館のグレイト・コートでは設計当初からレストランやカフェの場所を大きくとることが計画されていた。博物館内で可能な活動は、既存の施設の制約が大きい。そのため展示スペースに加えて、利用者が望むような活動スペースを設計計画に織り込むことが必要になる。しかし現状でも、大阪城天守閣でアンケートに応じてくれた40代の女性は、大阪歴史博物館にいったことがあるかの問い（Q18）に、「福祉フォーラムで1回行ったが展示は見えていない。でも、また展示も見に行きたい」と話す。展示とは全く関わっていない活動がきっかけでも、潜在的利用者を増やすことはある。

史跡公園においても、難波宮では犬や散歩に関わる回答が最も多く、その他には、「芝生遊び」や、「ゆっくり」、「紅葉」など、「遺跡復原」が印象に残っていたりその写真を撮影したりする利用者以上に多岐にわたる楽しみ方の回答が返ってくる。大阪城公園についても、「景色」と季節柄の「紅葉」が筆頭にあがり、同様の傾向がある。これらは、「難波宮は犬の散歩ついでの人が多く遺跡に関心が薄かった。すごく勉強になった。（女子学生）」、「（大阪城公園内で、）一番印象にのこっているのは？」という質問に答えは『城』だろうと思いきや『梅』と言われ、城ではなかった。（男子学生）」という感想にもみえるように、幾分子想を裏切る回答結果だったのかもしれない。

## 教育

先ほど、ビクトリア&アルバート博物館に新設された教育センターについて触れたが、教育活

動も展示のプラス  $a$  として、展示見学者以外にも利用者を獲得する、あるいは利用者にはリピーターを増やすことにつながる。ビクトリア&アルバート博物館では、地下改修により教育関連施設として、ヘンリー・コール・ウイング（Henry Cole Wing）と初代館長の名前を冠するブロックの、以前の2倍以上にあたる地下2階分というスペースがまるまる割かれるようになった。そこには直接外へアプローチできる出入り口も設けられ、博物館開館時間外でも、このセンターが独自にイベントやワークショップを開くことを可能にした。また、デジタル・スタジオやオーディトリウム、デザインや制作のための工房なども設けられた。ユニークな取り組みとしては、絵や彫刻からコンピューター関連やジュエリーまで多岐にわたる制作活動に取り組む若手アーティストたちに、毎回2人ずつ半年間スタジオを貸し出していることがあげられる。その間、アーティストたちはこの博物館のあらゆる資料と設備にアクセスすることができる一方で、サックラー・エデュケーション・センターが主催するアート・ワークショップなどに参加をすることになる。このように、このセンターが教育の対象とするのは子どもだけではなく、芸術系大学との提携も含め、専門的なレベルにも及ぶ。

一方、日本ではつい最近出された社会教育法省令でやや改善されたものの、いまだに博物館使命の社会的役割の優先課題に「教育」がないところが問題であるのだが、大阪歴史博物館は教育活動に熱心な博物館のうちの1つである。併設するホールや会議室で公開講座やシンポジウムなどをはじめ、展示施設の見学者以外にも様々なイベントに解放されている。なにより画期的だったのは、8階に「歴史を掘る」という体験学習型の常設展示コーナーを併設していることである。これは、発掘調査成果を活用する考古資料センター的な機能として、主に子どもの利用者を対象に、パズルやパソコンを使う土器の復元ゲームや、再現された発掘現場で実際に遺跡の発掘調査を体験できたりするコーナーが常設される。博物館の目標にも、「子どもをはぐくむ博物館」を目指すことが明示されている。先述のヨルビック・バイキング・センターには隣接して、運営母体を同じくするDIG（英語で「掘る」「発掘する」の意）という発掘調査の体験学習施設がある。これを模したこの手の模擬発掘体験型の展示は、この館での採用を契機に平成19年10月に開館した兵庫県立考古博物館においても併設され、日本の博物館でも受容されつつある。

50代以上の利用者に対する生涯学習的側面での教育的貢献は、日本ではどの館も比較的熱心におこなわれている。今回のアンケート調査を見ても、大阪歴史博物館では半分以上、大阪城天守閣では少し減り3分の1の利用者が50代以上であった。実際のところでは、博物館の主催する歴史シリーズ講演会やボランティアガイドなどはこの利用者層に支えられているともいえる。そして近年、この層に加え、未来を担う子どもたちの総合学習に貢献することが、わずかずつひろがる様子は見えよう。その上で、次に考える可能性は、博物館利用者層としては薄くなりがちで、10代後半～20代の高等教育以上のレベルでの教育との連携となる。博物館実習の受け入れなどは、一般的におこなわれているが、ビクトリア&アルバート博物館にみえられるような高度なレベルでの教育連携とサポートは、今後の視野にいれておきたいと思う。

## 博物館のダイバーシティー

イギリス政府の文化・スポーツ・メディア省は、イギリスでの集客施設としての博物館人気はそのバラエティーの豊富さにあるのではないかと分析する<sup>29)</sup>。博物館という1つの特定のタイプ

	目的外の+ a	食 事	教 育	場所性	利便性	目玉商品	本物／復原
大阪歴史博物館	△	△	○	△	○	△	両方
難波宮	○	○	—	○	—	△	両方
大阪城天守閣	○	○	△	○	—	○	両方
大阪城公園	○	○	△	○	○	○	本物
大英博物館	○	○	○	○	△	○	本物
テイト・モダン	○	○	○	○	○	○	本物
ヨルビック	○	—	○	○	○	○	両方
ビクトリア&アルバート	○	○	○	○	○	△	本物
アイアンブリッジ	○	○	△	○	—	○	本物

\*○：充分にバラエティーにとんでいる、△：ないわけではないが活かしきれていない／さほど目立たない、—：ない／悪い。

図3 博物館の魅力比較

の社会教育施設としてのカテゴリーの中で、多種多様な博物館が存在して人気を呼ぶ館がいくつか存在するようになれば、博物館全体として、訪れるに足る楽しめる施設であるらしいという評判があがる。評判のある施設が博物館とカテゴライズされれば、「それは楽しいものだろう」という概念が定着すれば、集客につながる。そして利用者の増加が館内でのダイナミックな予想外の動きにつながり、利用者満足度につながるような良い循環が生まれるに違いない。現状では予想外をさけたがる施設が多いところにも問題があるのだが。

図3では、本稿で取り上げた例から抽出した博物館の魅力となり得る要素を大まかに分類してみた。「○」は明らかに魅力となっている場合で、「—」は悪い、もしくは該当しない場合である。「△」であえて表記をしたものは、全くないわけではないがうまく活用されていない例である。例えば、大阪歴史博物館の「食事」欄が「△」であるのは、館内にレストランはあるが、そのレストランが大英博物館やテイト・モダンの場合のように博物館の看板になっているようにもみえないという短所である。家族連れなどが持ち込んだお弁当を食べるような場所はないが、(アンケートの回答で博物館と難波宮を1日のうちに、はしご利用する場合はほぼないことから)隣接する難波宮でお弁当を広げる場合もほぼない、ということからくる。ただし、計画的に難波宮に訪れようとした際に雨天の場合の担保がないということもある。一方で大阪城天守閣に「○」がついているのは、公園の天守閣前広場に屋根のある安価な飲食店が多くあり、アンケート調査の回答でも印象に残ったものに、「たこやき」、「うどんが」などとあげられていることによる。また、大阪歴史博物館の「場所性」欄が「△」であるのも、地下遺構の保存や案内解説もおこなわれているが、それが看板となって集客があるとも、また難波宮との一体利用がうまく進むとも、アンケート調査の結果からはあまりみえない。集客の可能性としての素材もっているが、うまくフル活用しきれていないところで「○」でなく「△」にした。また、様々な地域に由来するものを集めて展示する大英博物館やビクトリア&アルバート、テイト・モダンの場所性が「○」であるのは、その館がその場にあることに景観として大きな意味を占めているからである。先にも触れたように、その場からその博物館が消えることが想像できない。

やや恣意的に見えることがあるかもしれないが、アンケートに寄せられた回答を基準にして、

アンケート調査を実施していないイギリスの例をもあてはめてみた。その基準は本稿でとりあげたような統計や、筆者の実見及び担当職員などとの会話などから先述の例示の中から抽出したものである。もちろん、あくまで筆者の分析にすぎないため、反論の余地は大いにあると思う。

改めて表をみると、大阪歴史博物館・難波宮と大阪城天守閣・大阪城公園、の博物館と史跡公園のセット2件には、構想意図としては得意不得意とする要素に補完的な関係がある。掲示されているこの2件の一体化構想が実現すれば、ダイバーシティを包括する理想的な博物館・史跡一体の広域歴史展示・体感施設となり得る。その増設のためには、先に例示したアイアンブリッジ峡谷博物館の事例がヒントになるだろう。すなわち、より一体感を増して町ぐるみ博物館にするための方策である。2地点4アトラクションの共通ガイダンス施設にイメージされる装置などが必要となってくるであろう。というのは、ガイダンス施設をもって、展示からフィールドに、また体験学習からフィールドに誘うきっかけができるかもしれないからである。また、別の目的で史跡公園を利用に来た、たまたまフィールドに立った利用者にも、ガイダンス施設を介して、さらに詳しく歴史を知ってもらう展示施設に橋渡しができれば潜在的利用者を実質利用者に転換できる。

本稿であげたイギリスでの事例と、大阪でおこなったアンケート調査の結果を概観し、比較する過程で気づいたことがある。それは、イギリスでも日本でも、場所性に根ざした本物性は、どうしてもなく差のつく集客の目玉となることである。その場に位置することに必然性があるから、わざわざそこにはいかなければならない。蔵に所蔵されるかのように、展示物がコンテキストから大幅に切り離されてしまった展示では、その場にいることの感激も少なく、わざわざその場所で見ると必然性がない。展示のみの博物館も、館の空間が場所性を生み出すような空間になった時には、その場が強調されるのであろう。場という点で、アイアンブリッジ峡谷博物館はまさに、その場において当時の記憶をとどめる町中のあらゆるものを記録媒体として展示構成され、総合的な博物館体験を提供している。展示物の大半が復原であるヨルビック・バイキング・センターですら、根柢のあるイメージであり、過去にその場にあった。周辺の町並みはかわっても、丘や海など広範囲での景観に占める位置は同じである。そして、場所性をさらに強調するための建物の地下にある遺構を復原する遺構展示がリニューアル後には加わる予定である。

日本の博物館には所在する必然性の欠落があまりにも顕著である。大阪城の場合には、たとえ城が鉄筋コンクリート造であれ、その場所性は本物である。そこにたどり着くまで、堀や石垣を歩き、坂をのぼり、当時と同様な本物体験がそこにはある。例えば難波宮には、前掲のコメントからも読み取れるように、それを可能にして魅力を発信する可能性をもつ。まさに、サイト・ミュージアムとはこの利点を活かすことが期待される展示施設であり、この点をもう少し振り返って吟味してみたいか。

## 7. まとめにかえて

利用者のニーズは社会の価値観の変動に影響をうけて変化する。社会的に他者を認めることによって多様化する中で価値観にもダイバーシティが求められる現代では、利用者のニーズも同時に多様化し、ある意味では要求が高くなっているのかもしれない。大阪府の博物館を支援する

会が主催したイベントで、求められる博物館像を来場者に問うアンケート調査がおこなわれた<sup>30)</sup>。そこでは、大阪府立の博物館に主眼をおき、それらの館から発想された博物館のイメージを時系列的に遺跡型博物館・テーマ型博物館・体験型博物館という3つに分類し、より好ましいと思う博物館像とその理由をたずねたデータがある<sup>31)</sup>。その結果、選択の類計やコメントをみても、利用者側のニーズが多様化していることがあきらかであった。「いろいろあってよい (10名)」というコメントが最も多くみられた。ただ、その中にさらに、それぞれ館のおかれた状況や特性によって機能分化した館があればよいという意見と、それぞれの館が複数の側面を備え、さまざまな機能をとりいれるべきという意見と2タイプあった。様々な施設やシステムとの連携を求める声も、その反映であろう。その一方で、比較的年齢層の高い人の意見(特に男性)にはまとまりがあり、現状で慣れ親しんだテーマ型博物館が最も好ましい、体験型は歴史系にはなじまない、といった保守的な意見も多かった。おそらくこの層が、現状の博物館における安定的な利用者層なのであろう。しかしながらその他の利用者層においては、各々のニーズが放射状に広がり分散している。

難波宮のような施設による制約が少ないだけ広い空間は多様な用途に開かれている。利用者それぞれが希望に応じた楽しみ方が展開できる期待が高まる。それは、難波宮で学生が聴取したコメントにも反映される。「難波宮では散歩の人が多く、史跡見学を目的にした人は少なかったが、ある意味では開けていて、身近なものになっていて、すごくいいと思った。…(中略)博物館ももっと身近になったらいいのになと思った(女子学生)」、「難波宮では公園が生活の一部になっているので、歴史的な場所であるということは意識しないが誇らしいと言ってくれた人が印象に残った(女子学生)」、「難波宮では、小・中学生の女の子と話した。正直に、歴史には一切興味が無いといわれたが、それでも残した方がいいですか?という問いには、残してもらわないと困る、小さい頃からの遊び場なので、と言われた。史跡としての価値ではないが、身近なものであるとっていた。(女子学生)」という所感があった。

博物館も史跡公園も、利用者にはダイバーシティを包括した利用の可能性が望まれている。繰り返し利用してもらい、なくなったら困ると言う子どものような感覚が、博物館に関しても、史跡公園に関しても浸透すればすばらしいと思う。そして、繰り返し利用する人に、少しずつ歴史的側面に気づいてもらえればいいことはない。ただし、強制することは特定の利用者を除いて排除することになるので、そうした浸透の方策についてのバランス感覚はイギリスの事例に学ぶところが多いようにも見える。ダイバーシティを寛容に受け入れ、他者を排除することなくダイバーシティ間での文化交渉の場であることが、今最も求められる博物館像なのかもしれない。

本項で引用したアンケート調査の実施にあたり、大阪歴史博物館及び大阪城天守閣には、利用者の多い時期のご負担だったにもかかわらず快くご協力をいただきました。博物館実習授業担当の一瀬和夫氏と博物館事務室の皆様にはアンケート調査の準備と実施にあたって大変お世話になりました。末筆ではありますが、ここに記して深く感謝の意を表します。また調査成果は、関西大学博物館実習を平成20・21年度に受講した学生の皆さんが実際にアンケート調査を通じて収集したデータに基づくものです。貴重な資料をありがとうございました。この授業内容に関する詳細は、本号にある報告(一瀬)をご参照ください。

## 註

- 1) 詳細は、一瀬和夫2009「大阪府における博物館群の問題—遺跡教育の中で—」『日本史研究』565号 46-57頁、小川裕見子2009「大阪府立博物館の「見直し」の経過について」『古代学研究』181号 34-36頁、を参照されたい。
- 2) 「大阪府財政再建プログラム案」は、大阪府の行財政改革関連ホームページからダウンロード・閲覧可能。(http://www.pref.osaka.jp/gyokaku/gyozaisei/gyozaiiprogramh18.html) 2010年1月現在。
- 3) 小川裕見子2007「特集 未来を拓く博物館 イギリスの博物館」『明日への文化財』58号 1-11頁
- 4) 2005・2008年度 Association of Leading Visitor Attractions (http://www.alva.org.uk/) 及びイングランド政府文化・メディア・スポーツ省 (Department of Culture Media and Sport) 調べによる。2005年度の統計は前掲註3)の拙稿でも引用。ホームページURLは、2010年1月現在。
- 5) 入館無料は基本的に常設展示に限られ、特別展には入館料が課されることが多い。大英博物館などは元々無料であるが、常時利用者に寄付を募る。また、この完全無料化の導入以前にも、有料の博物館(自然史博物館、ビクトリア&アルバート博物館など)は閉館が迫った特定の時間、例えば午後4時などを過ぎると無料になっていた。
- 6) イングランド政府文化・メディア・スポーツ省 (Department of Culture Media and Sport) 調べによる。(http://www.culture.gov.uk/what\_we\_do/museums\_and\_galleries/3380.aspx) 2010年1月現在。
- 7) 2005年度については文化・メディア・スポーツ省が2005年度に出した指針、*Understanding the Future: Museums and 21<sup>st</sup> Century Life – The Value of Museums*. による。2008年度については Association of Leading Visitor Attractions (http://www.alva.org.uk/) 調べ。ロンドン塔 (Tower of London) にも展示施設があることを考慮にいれ、博物館施設に相当すると見なすならば、10位のセント・ポール寺院 (St. Paul's Cathedral) 以外はすべて博物館及び美術館である。1.大英博物館593万人、2.テイト・モダン (Tate Modern) 486万人、3.ナショナル・ギャラリー (The National Gallery) 438万人、4.自然史博物館369万人、5.科学博物館270万人、6.ロンドン塔216万人、7.ビクトリア&アルバート博物館206万人、8.国立海洋博物館 (National Maritime Museum) 205万人、9.ナショナル・ポートレート・ギャラリー (National Portrait Gallery) 184万人、10.セント・ポール寺院168万人がトップ10である(千人以下切り捨て)。(http://www.alva.org.uk/visitor\_statistics/) 2010年1月現在。
- 8) Appadurai, A. 1986 (ed.) *The Social Life of Things: commodities in cultural perspective*. Cambridge, Cambridge University Press. に紹介された概念である。
- 9) この指針及びこれに対する様々な人々からの答申の概要は省の公式ホームページからダウンロードが可能である。(http://www.culture.gov.uk) 2010年1月現在。
- 10) Department for Culture, Media and Sport, Museums and Cultural Property Division, 2005. *Understanding the Future: Museums and 21<sup>st</sup> Century Life – The Value of Museums*. p. 7. 和訳は筆者による。
- 11) Pomian, K. 1990 *Collectors and Curiosities: Paris and Venice, 1500-1800*. Cambridge, Polity Press. pp.35-8, 48.
- 12) Olmi, G. 1985 “Science – Honour – Metaphor: Italian cabinets of 16<sup>th</sup> and 17<sup>th</sup> centuries” In O. Impey and A. MacGregor (eds.) *The Origins of Museums*. pp. 5-16.
- 13) 前掲註12)。
- 14) Fabianski, M. 1990 “Iconography of the Architecture of Ideal *Musaea* in the Fifteenth to Eighteenth

- Centuries” *Journal of the History of Collections*. 2.(2) : 95-134.
- 15) Bennett, T. 1995 *The Birth of the Museum: History, Theory, Politics*. London, Routledge. p.181
  - 16) 1827～1900、本名はオーガスタス・ヘンリー・レーン・フォックス (Augustus Henry Lane Fox)。イギリスの軍人で考古学者。1882年にイギリスで最初の古代遺跡調査官となる。
  - 17) Fox, A. H. L. (Pitt Rivers) 1891. “Typological Museums, as Exemplified by the Pitt Rivers Museum in Oxford and His Provincial Museum in Farnham Dorset” *Journal of the Society of Arts*. 40 : 115-122.
  - 18) Fox, 1891 : 115-116. 和訳は筆者による。
  - 19) 前掲註15) Bennett, 1995 : 24-25.
  - 20) サックラー・エデュケーション・センターは2008年9月にオープンした。2009年3月にビクトリア&アルバート博物館を訪れた際に、センター事務室にたまたま居合わせた職員の方が案内・解説をしてくれた。
  - 21) 詳細は、ヨルビック・バイキング・センターのホームページを参照されたい。( <http://www.jorvik-viking-centre.co.uk/news1.htm> ) 2010年1月現在。
  - 22) 一瀬和夫2005「資料・展示開発とハンズ・オン」『博物館学ハンドブック』関西大学出版部
  - 23) 大阪歴史博物館の基本理念は、(1)都市「おおさか」を紹介する歴史系総合博物館、(2)難波宮のサイトミュージアム、(3)市民参加型の博物館、(4)大阪の歴史と文化に関する情報センター、(5)博物館ネットワークの推進、をあげる。大阪歴史博物館公式ホームページから閲覧可能。( [http://mus-his.city.osaka.jp/kan\\_info/gaiyo.html](http://mus-his.city.osaka.jp/kan_info/gaiyo.html) ) 2010年1月現在。
  - 24) 大阪城天守閣館長松尾信裕氏談。(平成21年11月29日)
  - 25) 「「元気な大阪」をめざす政策推進ビジョン」2009年3月策定。大阪市HPよりダウンロード閲覧可能。( <http://www.city.osaka.lg.jp/seisakukikakushitsu/page/0000033073.html> ) 2010年1月現在。
  - 26) 大阪城跡の発掘調査成果の現地説明会などでも、豊臣期の遺構と徳川期の遺構では来場見学者数に大きな違いがあるという。
  - 27) 正面玄関を入ってすぐの吹き抜け部分で、以前は大英図書館があった場所を一部を除いてカフェ、レストラン、インフォメーション・センター、ミュージアム・ショップなどを含んだオープンスペースに改築した。
  - 28) 20世紀半ばを中心に活躍した、多作で知られる建築家ジャイルズ・ギルバート・スコット (Giles Gilbert Scott) によるバンクサイド・パワー・ステーション (Bankside Power Station) を改築した。代表作にリバプール大聖堂、バタシー・パワー・ステーション (Battersea Power Station) など。
  - 29) Department for Culture, Media and Sport, Museums and Cultural Property Division, 2005 前掲註10)。
  - 30) 2008年8月3日、「歴史遺産と博物館」於・大阪市浪速区民センター。詳細は、一瀬和夫2009前掲註1) 及び大阪市の博物館を支援する会ブログ ( <http://osakahakubutukan.blog.shinobi.jp/> ) を参照されたい。
  - 31) 分類は一瀬和夫氏の定義による。詳細は、一瀬和夫2008「大阪府の博物館の建設推移—遺跡分類から見る—」『ヒストリア』第211号 62-67頁を参照されたい。